

## 「安息日論争」

2021年11月05日

「エブヤタルが大祭司であったとき、ダビデは神の家に入り、祭司たちのほかには食べてはならない供えのパンを食べ、一緒にいた者たちにも与えたではないか。」また、彼らに言われた。「安息日は人のためにあるのであって、人が安息日のためにあるのではない。だから、人の子は安息日の主でもある。」(マルコ福音書 2章 26節～28節)

ある安息日に、主イエスと弟子たちの一行は麦畑を歩いていた。弟子たちは歩きながら麦の穂を摘み、食べ始めた。もちろん、空腹を満たすためである。主イエスの宣教団は、食べ物も十分にない貧しい群れであった。民衆の主イエスに対する人気と支持を妬み、宣教活動を止めさせるため、目の色を変えて、一行の落ち度を探していたファリサイ派の人々は、安息日に麦の穂を摘んで食べる弟子たちの姿を見た。彼らは早速、「御覧なさい。なぜ、彼らは安息日にしてならないことをするのか」と詰め寄った。麦の穂を摘むことは、申命記 23章 26節に、「隣人の麦畑の中に入ったなら、手で穂を摘んでもよい。しかし、隣人の麦畑で鎌を使ってはならない」とあるように、鎌を入れて多くを盗むことは禁止されているが、空腹を満たすために手で穂を摘んでもよいとされている。問題は、安息日に穂を摘んだことで、何の労働もしてはならない安息日の律法に違反したと指摘したのである。安息日に関して、モーセの十戒の第四戒に規定されている。「安息日を覚えて、これを聖別しなさい。六日間は働いて、あなたのすべての仕事をしなさい。しかし、七日目はあなたの神、主の安息日であるから、どのような仕事もしてはならない(出エジプト 20章 8～10a節)。」安息日は、神が聖別された日として神の安息に招かれ、礼拝する。神への礼拝は、御言葉を聞くことで、それは、心を鎮めて自分自身を自問することでもある。また、仕事を止めて体を休める。魂と体の安息で、人間に回復するために定めた戒めである。ところが、主イエスの時代、ファリサイ派の人々は、仕事をしてはならないという戒めが強調され、何の労働も許されない日にしていた。安息日に、麦の穂を摘んだことは、労働に当たり、それは、安息日違反になると言い寄ったのである。主イエスは、「エブヤタルが大祭司であったとき、ダビデは神の家に入り、祭司たちのほかには食べてはならない供えのパンを食べ、一緒にいた者たちにも与えたではないか」と言われた。この故事は、サムエル記上 21章に記されている。ダビデはサウル王に追われ、供の者と逃避行をしていた。その途中、彼らは飢えて、祭司アヒメレクの所に行き、食べ物を求めた。祭司は、祭司しか食べはならない聖別されたパンを与え、ダビデの一行は、これを食べて飢えをしのいだ。主イエスは、律法を破って、生き延びたダビデの例を話された。そして、「安息日は人のためにあるのであって、人が安息日のためにあるのではない。だから、人の子は安息日の主でもある」と言われた。安息日は、人が魂と体を安息させ、回復するためにある。人が安息日に振り回されてはならない。ファリサイ派の人々は律法の形だけを守り、それを信仰深いとしていた。主イエスは、「山上の説教」において、ファリサイ派の人々の律法解釈を批判し、真に人を生かす律法を語っている。法は人を生かすためのものである。

逆に、法が自由を奪って管理し、人を殺す場合もある。権力者の「法と秩序を守る」という言葉は要注意で、彼らは法を都合よく解釈する。法を運用することを見極める視点が大切である。「だから、人の子は安息日の主でもある」という言葉は、後世の加筆で、主イエスはダビデに勝る自由と主権を持った方であるとの信仰告白である。